

新潟県栄養士大会2026ポスター発表

セッション1

会場：大会議室

発表時間：13:30—14:50

＊セッション1と2は同時進行

セッション1：学校健康教育、公衆衛生、フリー栄養、医療、福祉

- 1-1. 中学生に向けた「カルシウム・鉄セレクト給食」の取り組みとその効果
鈴木陽子（新潟市立関屋中学校）
- 1-2. 乳児保護者を対象とした離乳食講習会における教育的介入の効果— 質問紙調査による前後比較を用いた不安解消と実践的知識の取得 —
片山郁美（新潟市西蒲区役所健康福祉課）、他
- 1-3. 女子野球選手における増量を目的としたスポーツ栄養マネジメント
渡辺絵里子（株式会社日本フードリンク産業事業部栄養管理2課）
- 1-4. 高校生を対象としたローリングストック普及の取組—官民連携での全ライフコースへの食の防災対策—
土田直美（日本防災士会新潟県支部）、他
- 1-5. 退院後訪問栄養食事指導の実践報告 ～対象者選定から在宅支援への橋渡しまで～
高橋美希（公益社団法人地域医療振興協会湯沢町保健医療センター）、他
- 1-6. コード4調理の標準化に向けた野菜類の最適調理条件の検討
高橋美希（公益社団法人地域医療振興協会湯沢町保健医療センター）、他
- 1-7. 急性期病院退院後の多職種連携継続により誤嚥性肺炎による再入院を回避できた症例
熊倉ひとみ（信楽園病院）、他
- 1-8. 頭頸部癌化学放射線療法中の体重変化に対する管理栄養士および栄養サポートチーム介入の効果
本間信成（新潟県立がんセンター新潟病院栄養課）、他
- 1-9. 当院回復期リハ病棟における栄養状態と運動FIM利得の関連についての実態調査
伊東直紀（新潟脳外科病院栄養課）、他
- 1-10. 適切な経口維持支援に向けた課題抽出のための入所者の栄養状態の実態把握
平山景子（特別養護老人ホームコスモスの里）、他

ポスター発表 セッション 1(学校健康教育、公衆衛生、フリー栄、医療、福祉)

座長:北林 紘、佐藤友子

P 1-1

会員発表

中学生に向けた「カルシウム・鉄セレクト給食」の取り組みとその効果

○鈴木陽子¹⁾

¹⁾ 新潟市立関屋中学校

【目的】成長期にあたる中学生は骨量増加や初潮・筋肉量増加に伴い、カルシウムおよび鉄の必要量が増大する重要な時期である。しかし、好き嫌いややせ指向、朝食欠食等により両栄養素の摂取不足が課題となっている生徒がみられる。本取り組みでは、生徒自らが栄養素を意識して献立を選択する「セレクト給食」を実施し、知識の向上と主体的食行動の変容を図ることを目的とした。

【方法】新潟市立早通中学校の生徒(約270名)を対象に、カルシウムと鉄のセレクト給食を隔年で実施した。事前に全校朝会や食育だよりを活用し、カルシウム・鉄の体での働きや豊富な食品についての事前指導を行った。セレクトタイムでは、主菜(例:ししゃもフライ/とりのからあげ等)や飲み物(牛乳/コーヒー牛乳等)・デザートにおいて、カルシウムの豊富な献立と生徒の嗜好性の高い献立の選択肢を用意し、学校給食摂取基準であるカルシウム450mg、鉄4.5mgを超えるように生徒自身に選択させた。実施後には、選択理由、食生活意識の変化に関する振り返り記述を行い、残食率の測定も実施した。

【結果】事前指導およびセレクト給食を通じ、カルシウムと鉄の必要性に関する知識が向上した。実施後の振り返りとして「好きなものだけではカルシウム(鉄)が不足することが分かった」と記述した生徒が多く、自己の栄養バランスを意識する傾向が見られた。また、セレクト給食実施日の残食率は通常給食と比較して低下し、喫食意欲の向上も確認された。

【結論】セレクト給食は、楽しみながら自らの食事内容を考える機会を提供し、カルシウムおよび鉄への関心を高める上で有効な食育手法であることが示唆された。中学生期における主体的食行動の確立に向け、今後も家庭や地域と連携した継続的な栄養指導の展開が望まれる。

P 1-2

会員発表

乳児保護者を対象とした離乳食講習会における教育的介入の効果

— 質問紙調査による前後比較を用いた不安解消と実践的知識の取得 —

○片山郁美¹⁾ 横山菜穂子¹⁾

¹⁾ 新潟市西蒲区役所健康福祉課

【目的】乳児保護者を対象とした離乳食講習会(「はじめて」および「ステップ」)が、離乳食の進行時期に応じた保護者の不安感軽減や実践的な知識の取得、具体的な行動変容にどう寄与するかを検証した。

【方法】令和8年度に実施した離乳食講習会の参加者を対象に質問紙調査による前後比較を実施した。「はじめて」参加者(29名)および「ステップ」参加者(13名)を対象に、事前(記名式)と事後(無記名式)の調査票を同一IDで紐付けて分析した。事前調査では各段階の不安や負担感を、事後調査では実践的知識や行動目標を調査した。

【結果】はじめて期では、事前調査における主な不安(アレルギー75.9%、食べさせ方58.6%等)に対し、事後調査では「新しい食材は平日の午前中に試す」(79.3%)や「飲み込みの確認」(75.9%)といった具体的な行動意欲へ向かう傾向がみられた。また、事前不安と事後実践意欲のクロス集計の結果、事前に「量」に不安を抱えていた層の78.6%が「離乳食の量は身体発育曲線で確認する」を、「食べさせ方」に不安があった層の88.2%が「飲み込みの確認」を事後目標として選択しており、個別課題に対応した実践的知識の取得がうかがえた。さらに、ステップ期においても事後の意識したい項目として「補食について」(69.2%)や「食べる量」(61.5%)等、月齢や進行度に応じた具体的な行動目標を選択する傾向が確認された。また、講習会全体の満足度やスタッフの説明のわかりやすさに関する評価は、はじめて期において96.6%、ステップ期において100%と、いずれの段階でも概ね高い評価が得られた。

【結論】本研究の結果から、離乳食講習会は保護者の不安感の軽減だけでなく、個別や時期別の課題に対する実践的知識の取得や具体的な行動変容を促す上で有用なアプローチであることが示唆された。

P 1-3

会員発表

女子野球選手における増量を目的としたスポーツ栄養マネジメント

○渡辺絵里子¹⁾

¹⁾ 株式会社日本フードリンク産業事業部栄養管理 2 課

【目的】男性中心だった野球は、近年、女性も楽しむスポーツに変化している。現在の野球では、パワーだけでなく、柔軟性や敏捷性、さらには夏の暑さに耐える持久性など、様々な身体能力が求められる。対象チームは近年、夏季の暑熱環境による体調不良に伴い、練習を欠席する選手が増加していた。そこで、全国大会出場というチーム目標の達成に向け、夏季の身体づくりを基盤とし、体重増加によるパフォーマンス向上を目的としたスポーツ栄養マネジメントを実施した。

【方法】選手 21 名から、夏季に体重減少がみられ、増量が必要と判断した 3 名。期間は 2025 年 3 月～6 月の 2.5 か月間。身体計測、食事摂取量、身体活動量の評価と個別面談を実施し、チーム関係者から試合時のパフォーマンスに関する情報を収集した。食事摂取量は、写真法と食事記録法を併用し算出、身体活動量は TR 内容を直接確認後、聞き取り調査を行い、その後心拍数法と要因加算法にて推定値を算出した。導入前数か月の体重変動とエネルギーバランスを考慮し目標体重を個別に設定、具体的な栄養補給計画・行動計画を作成し、選手の要望を踏まえ栄養教育計画を立てた。

【結果】対象者 3 名全員が目標体重を達成し、期間中の体調不良は認められなかった。食行動の改善がみられ、終了後も体重・体調が維持され、パフォーマンスも維持または向上した。

【結論】個々の身体状況や食事・活動量を踏まえたスポーツ栄養マネジメントにより、目標体重の達成と食行動の改善につながったと考えられる。また、終了後も体重・体調が維持されたことから、夏季のコンディショニングにおける継続的なスポーツ栄養マネジメントの有用性が示唆された。

P 1-4

会員発表

高校生を対象としたローリングストック普及の取組

ー官民連携での全ライフコースへの食の防災対策ー

○土田直美¹⁾ 石上和男²⁾ 別府 茂¹⁾

¹⁾ 日本防災士会新潟県支部 ²⁾ 新潟医療福祉大学

【目的】多発する自然災害の発生に対応するためには在宅避難を想定した食の備えは必須であり、家庭でのローリングストック法が有効である。特に若い世代では、食の備えに関する知識と技術を身につけ、災害時も健康に生き抜く力を身につけることが重要であることから、その方策を検討するための調査と取組を行った。

【方法】新潟県内の県立高校 2 年生 79 名を対象に、家庭基礎の授業において①自然災害に関する講義、②ポリ袋調理実習、③ローリングストック等の食の備えに関する講義、④アンケート調査を実施した。

【結果】自然災害の被災経験は「あり」が 18 人(22.8%)、「なし」が 58 人(73.4%)であり、食品や物資の備蓄状況は「備えている・やや備えている」が 52 人(65.9%)で、「あまり備えていない・備えていない」が 24 人(30.4%)であった。食品の備蓄状況で最も低かったのが、①肉の缶詰、②大豆・大豆加工品(缶詰・高野豆腐など)、③果物(日持ちのする果物・缶詰等)、④乳製品であった。物資の備蓄状況では、カセットコンロやカセットボンベは他の物資にくらべて低くなっていた。ポリ袋調理の認知度とローリングストックの認知度について関連を見ると「ポリ袋調理を知らない」者は「ローリングストックも知らない」者である割合が有意に高い傾向であった($p<0.001$)。

【結論】調査対象が高校生という観点から、食の備えを進めるためには本人への教育並びに家庭や地域住民に向けたポリ袋調理やローリングストックの認知度を高めるための取組が必要である。今後はさらに①備えにくい食品や物資を使った家庭科教育や各地域での講座の実施、②ポリ袋調理とローリングストックを組み合わせた災害時の食対策に関する地域リーダーや指導者教育、③全ライフコースに向けて自治体の防災部局や栄養部局と連携した講習を行うなど、官民連携による食の面からの防災対策の推進が求められている。

P 1-5

会員発表

退院後訪問栄養食事指導の実践報告 ～対象者選定から在宅支援への橋渡しまで～

○高橋美希¹⁾ 柳 真紀¹⁾ 伊藤かのん¹⁾

¹⁾ 公益社団法人地域医療振興協会湯沢町保健医療センター

【目的】令和8年度診療報酬改定において「退院後訪問栄養食事指導料」が新設された。当院は地域包括ケア病棟を有し、在宅復帰支援に取り組んでいる。本指導料の導入にあたり運用体制を整備し実践したため、対象患者の特徴および管理栄養士の役割について報告する。

【方法】令和8年6月から9月に退院後訪問栄養食事指導料を算定した2症例を対象に後方視的に検討した。退院前アセスメントにより訪問目的を明確化し、医師の指示および患者・家族の同意を得て介入した。訪問では生活環境下での栄養アセスメントを実施し、その結果を在宅支援者へ情報共有した。

【結果】症例1は摂食嚥下障害を有する患者で、嚥下調整食を準備する介護者への支援を目的に介入した。食事記録から、栄養補助食品を利用し必要栄養量を満たしていたため、継続すべき摂取量をケアマネジャーおよび訪問看護師へ申し送った。症例2は独居の高齢女性で、食事の準備は同じマンションに住む家族が行っていた。本人と家族の食事に対する認識の差から、今後の塩分摂取過剰もしくは低栄養が考えられたため、生活環境を評価した。栄養状態に大きな変化は認めなかったが、おもに今後の体重変化の留意点をケアマネジャーおよびデイサービスへ共有した。両症例とも在宅支援者へ栄養管理上の着眼点を引き継ぐことができた。

【結論】退院後訪問栄養食事指導では、栄養状態の評価だけでなく、入院中から把握した患者の食習慣や嗜好等を踏まえ、継続可能な望ましい栄養管理の方向性を在宅支援者へ引き継ぐことが重要であった。管理栄養士が患者・家族・在宅支援者をつなぐ橋渡し役となることで、退院後の切れ目のない栄養支援につながる可能性が示された。また、本指導料は退院後1か月以内という限られた期間の介入であることから、在宅支援者への円滑な引継ぎが重要であり、在宅療養支援を推進する一手段として今後の活用が期待される。

P 1-6

会員発表

コード4 調理の標準化に向けた野菜類の最適調理条件の検討

○高橋美希¹⁾ 雲尾洋希²⁾ 井澤 藍²⁾

¹⁾ 湯沢町保健医療センター栄養管理室 ²⁾ 石本商事株式会社

【目的】日本摂食嚥下リハビリテーション学会嚥下調整食分類 2021「嚥下調整食4」（以下コード4）は、誤嚥や窒息リスクに配慮し、かたすぎず、ばらけにくく、貼りつきにくい食事とされているが、具体的な調理条件は示されていない。調理者による物性のばらつきを抑え、誰もが再現可能な調理基準作成を目的として、コード4で使用する野菜類について最適調理条件を検討した。

【方法】当院のコード4で使用予定の野菜類20食品を対象とし、酵素処理群（軟化溶液1%）および非処理群を設定した。加熱時間、物性適合性、形態保持性および料理への適合判定を比較した。物性適合性はIDDSIフレームワークのFork Pressure Testを参考に、フォーク側面による圧迫評価およびフォーク押しつぶし試験を実施した。形態保持性は5段階（5点：原形維持、1点：形態保持困難）、総合判定はA（最適）からD（不適）の4段階とした。評価は摂食嚥下リハ栄養専門管理栄養士1名、調理師2名で行い平均値を採用した。

【結果】酵素処理群では非処理群よりも加熱時間が短縮（時間短縮率59.5%）したが、総合判定Aは酵素処理群で少なかった（3食品 vs 11食品）。酵素処理群では、ブロッコリーおよびカリフラワーで顕著な溶解を認め、花形人参では外側のみ軟化し中心部に硬さが残るなど、形態保持性の低値（平均2.9点）や軟化の不均一性がみられた。

【結論】酵素処理は加熱時間を短縮したが、食材によっては過軟化や形態保持性の低下を認めた。酵素を使用せず加熱時間を調整することで、コード4に適合できる食材も認められた。食材ごとに最適な調理条件は異なり、一律の調理方法ではなく食材特性に応じた条件設定が重要である。本検討結果をもとに調理マニュアルを整備し、調理者の経験に依存しない安定した嚥下調整食の提供と、調理負担の軽減に活用していきたい。

P 1-7

会員発表

急性期病院退院後の多職種連携継続により誤嚥性肺炎による再入院を回避できた症例

○熊倉ひとみ¹⁾ 渡部裕美子²⁾ 朝妻えり子²⁾

¹⁾ 信楽園病院栄養科 ²⁾ 信楽園病院リハビリテーション科

【目的】多職種連携による食支援は、入院中のみならず退院後の外来フォロー・継続した介入が重要である。当院では、嚥下外来や訪問栄養食事指導を実施していないため、摂食嚥下障害患者の退院後のフォローが課題となっている。

【方法】20XX年誤嚥性肺炎にて入院した70歳代男性患者を対象とした。短期間に、誤嚥性肺炎にて再入院した患者に対し、入院中および退院後も、管理栄養士を中心とした食支援を継続した症例を報告する。

【結果】退院間近のVEでは、家人が調理したメニューを検査食として使用し、自宅退院後の食事形態の調整等を行った。退院後は誤嚥性肺炎による入院を繰り返さないこと、標準体重まで増加することを目標とし、入院中に担当した管理栄養士が、外来での栄養食事指導を継続した。また、主治医、ケアマネジャー、訪問看護と情報共有を行った。入院時FILS2→退院時FILS7→退院後FILS8と改善を認め、体重は退院後5.4kg増加した。誤嚥性肺炎による再入院無く、自宅療養を継続できた。

【結論】外来栄養食事指導を継続し、指導内容が自宅で無理なく継続できているかを定期的に評価することが必要である。入院中の食支援が退院後も継続できる為に、管理栄養士の果たす役割は大きい。

P 1-8

会員発表

頭頸部癌化学放射線療法中の体重変化に対する管理栄養士および栄養サポートチーム介入の効果

○本間信成¹⁾ 小山智子¹⁾ 田中朋子¹⁾ 星由紀子¹⁾ 熊谷優美¹⁾ 高橋昌子¹⁾

¹⁾ 新潟県立がんセンター新潟病院栄養課

【目的】頭頸部癌化学放射線療法（CRT）中の体重減少は有害事象の増強や治療完遂率低下に関連するため、栄養療法は重要な支持療法の一つとされている。当院では2018年4月より頭頸部癌CRT全症例を対象に管理栄養士と栄養サポートチーム（NST）による積極的な栄養療法を実施している。本研究では全症例介入における体重変化率および治療完遂率が、当院での先行研究（NST介入、患者適応条件ありの前向き研究）と差があるかを後ろ向きに検討した。

【方法】2018年4月～2022年3月にシスプラチン併用CRTを施行した頭頸部癌患者75例を対象とした。管理栄養士は週3日以上患者の状況を確認し、食事・経腸栄養の提案、ならびにNSTによる週1回のカンファレンスと多職種支援を実施した。評価項目として治療前後の体重変化率および治療完遂率を先行研究（n=12）と比較した。さらに、先行研究で除外対象であった「76歳以上」「上部消化管切除既往あり」「重複癌あり」の各要因による影響についても2群間比較を行った。

【結果】本研究群の治療前後の体重変化率は $-2.8 \pm 4.2\%$ 、治療完遂率は84.0%（63/75例）であり、先行研究（ $-2.4 \pm 2.9\%$ 、75.0%）と比較して有意差は認められなかった（それぞれ $p=0.76$ 、 $p=0.88$ ）。また、76歳以上・75歳以下、上部消化管切除歴の既往、重複癌の有無による2群間比較においても体重変化率・治療完遂率ともに有意差は認められなかった。

【結論】高齢者や重複癌など多様な背景を持つ症例を含む全症例介入において良好な体重維持と治療完遂率が得られた。管理栄養士とNSTによる積極的な栄養療法は頭頸部癌CRTを安全かつ計画通りに完遂させる上で有効な支持療法であることが示唆された。

P 1-9

会員発表

当院回復期リハ病棟における栄養状態と運動 FIM 利得の関連についての 実態調査

○伊東直紀¹⁾ 長岡輝之²⁾ 椎野牧子³⁾ 小林久美子¹⁾

¹⁾ 新潟脳外科病院栄養科 ²⁾ 新潟脳外科病院リハビリテーション科

³⁾ 新潟脳外科病院看護部

【目的】回復期リハビリテーション病棟（以下、回復期病棟）では入院中に栄養状態が改善した患者は運動 FIM 利得が有意に高かったとの報告があることから、積極的な栄養介入が求められる。そこで、我々は当院回復期病棟入院患者を対象に栄養状態と運動 FIM 利得の関連について調査を行った。

【方法】2024 年 7 月から 2025 年 6 月までに入棟し軽快退院した患者 129 名を対象に月に 1 度のモニタリングによる栄養状態や運動 FIM に関するデータを調査した。調査したデータから「栄養障害あり」と「なし」の 2 つのグループに分け、t 検定を用いて栄養状態と運動 FIM の関連について解析を行った。

【結果】栄養障害なしの群の方が運動 FIM 利得は有意に高いという結果が得られた。エネルギー充足率では有意差がみられなかったが、たんぱく質充足率では充足率が高い群の方が有意に高いという結果が得られ、高い群での平均たんぱく質摂取量は $1.3 \pm 0.1 \text{g/kg/日}$ だった。

【結論】本研究でも栄養障害の有無が運動 FIM 利得に影響を与えていることが確認された。特に BMI やたんぱく質摂取量が関与していることが示唆された。低栄養患者には体重増加を目指すためにエネルギー蓄積量を加味することが推奨されており、たんぱく質必要量についてもリハビリ患者は 1.2g/kg/日 以上に設定することが勧められている。両者ともに当院では十分に考慮されていなかったため、今回の研究結果をもとに今後は栄養介入を行っていくこととしたい。

P 1-10

会員発表

適切な経口維持支援に向けた課題抽出のための入所者の栄養状態の実態把握

○平山景子¹⁾ 田村朝子²⁾

¹⁾ 特別養護老人ホームコスモスの里 ²⁾ 新潟県県立大学院健康栄養学研究科

【目的】本施設では多職種連携による経口維持加算の算定を開始した。今後の適切な経口維持支援に取り組むため、入所者の食事形態と栄養状態の関連から実態を把握し、取組課題を見出すことを目的とした。

【方法】入所者 67 名（ 90.0 ± 8.1 歳、介護度 3.8 ± 0.8 ）を対象とし、摂食している食事形態で 2 群に分け、身体状況及び栄養状態を比較した。なお群分けは常食群（常食・刻み食）29 名（ 88.8 ± 8.2 歳、介護度 3.4 ± 0.7 ）と嚥下調整食群（極刻み食・ミキサー食・ゼリー食）35 名（ 91.0 ± 8.0 歳、介護度 4.1 ± 0.8 ）とした。

【結果】身体状況では嚥下調整食群が常食群に対して体重、BMI、FILS が有意に低値を、介護度が有意に高値となった（ $p < 0.001$ ）。食事摂取方法では、嚥下調整食群において自立の割合が有意に低く、一部介助、全介助の割合が有意に高くなった（ $p < 0.001$ ）。また、体重当たりの摂取エネルギーおよびたんぱく質が常食群に比較して有意に低くなった。低栄養リスク判定では嚥下調整食群で中リスク、高リスクの割合が有意に高くなった（ $p = 0.025$ ）。

【結論】嚥下調整食群で体重、FILS、摂取栄養量が有意に低く、低栄養リスク者の割合が有意に高いことから、適切な経口維持支援に取り組むための課題として、栄養強化に加え、口腔・リハビリに取り組み摂食嚥下機能の向上の必要性があげられた。